

News Letter

No. 08

2023年12月発行

WEBサイトはこちら▼



お問い合わせ/広島大学大学院 人間社会科学研究科 教職開発専攻(教職大学院) 広報担当:寺内大輔
東広島市鏡山1-1-1 TEL:082-424-7146 e-mail:terauchi@hiroshima-u.ac.jp https://kyoshoku.hiroshima-u.ac.jp/

アクションリサーチⅢ発表会

教育実践開発コース

9月8日・9日、教育実践開発コースアクションリサーチⅢ発表会が開催され、それぞれの院生が6~7月に行った実地研究Ⅲの成果が発表されました。

1年生は口頭発表形式、2年生はポスター発表形式で各院生の研究テーマに関する実践の中間発表を行いました。発表会には、教職大学院生や指導教員、副指導教員が参加し、発表内容に対する意見交流が活発に行われました。また、教職大学院には様々な校種・教科の院生が在籍しているため、様々な視点から意見交流・自分の研究の見つめ直しをすることができました。

発表題目例

- 小学校における学級経営に関する一考察
—学級集団に対する教師のアセスメントに焦点を当てて—
- 小学校理科における「子どもの学びにくさ」の実態に関する研究
—第3学年の単元「風やゴムの力」に焦点を当てて—
- 中学校音楽科における音楽と「生活や社会」との関わりについて考える授業の開発
- 地理総合における内省性を重視した批判的思考力を育成する授業の開発
—質問紙調査による実態把握を通して—

アクションリサーチとは

個々の課題に対して、自ら学校で様々な実践(アクション)をし、その振り返りを行うことによってすすめていく研究です。本教職大学院の特色のひとつとなっています。

発表会での意見をもとに、自分の考えを整理することができました。発表会を踏まえ、次の実地研究(アクションリサーチⅣ)に向けて個人の課題解決や実践の準備をしていきたいと思います。

執筆 沖坂 柚香 (教育実践開発コース1年生)



アクションリサーチ 中間発表会

学校マネジメントコース

8月12日、学校マネジメントコースアクションリサーチ中間発表会を開催し、大学院を修了された先輩方(旭の会)にも多数参加いただきました。2年生の3名が研究の進捗状況を発表し、質疑応答の場面においては、貴重なご意見をいただきました。次に「先輩からの講話」として、教職大学院学校マネジメントコース第2期修了生の緒方陽子様(広島県教育委員会豊かな心と身体育成課教育指導監)より「教職大学院から続く私のMBB」をテーマに、大学院における研究が今につながっていることをお話しいただきました。

先輩方から発表を聞かせていただく中で、印象に残っているのは、「研究をしていく中で、自分が大事にしている核は何なのかをじっくり考え、葛藤したことが現在に生きている」ということです。これまで先輩方が重ねてきた研究や思いを大事にしつつ、改めて自身も先輩方に続く研究をしていかななくてはならないと気を引き締め直す機会でした。

教育委員会や管理職として活躍の先輩方から有益な示唆をいただきました



発表者

橋本嘉文

- 挑み続ける教職員が育つ学校づくりに関する研究
—協働的省察モデルの構築を通して—

中原宏美

- 「主体的に学ぶ児童」が育つカリキュラム・マネジメントに関する研究
—学びの深さ(学力・学習の質)に着目して—

長光優樹

- 「生徒が主語」の学びの実現に向けたカリキュラム・マネジメントに関する研究



執筆 山田 龍彌 (学校マネジメントコース1年生)



▲コロナ禍を経てやっと敢行できました。たくさんの方の学びました



▲現地の子どもたちへの授業実施。もちろん英語です!

本講義では、多くの異文化に触れ、さらに現地での授業実践という非常に貴重な体験をすることができ、また、一緒に渡航したメンバーとは絆を深めることができ、一生の思い出となります。講義を通して異文化交流を通して広い視野を持つことや、コミュニケーションの重要性を学ぶことができた。この授業でしか得ることのできない貴重な体験ができました。

学校見学、授業実践はノースカロライナ州ローリーにある、エクスプローリス小・中学校でそれぞれ1日、計2日間実施されました。初日は中学校で「鳥獣戯画」や「英語俳句」を、2日目には、小学校で「兜づくり」や「だるまさんの一日」をテーマとした授業実践が行われました。いずれも異文化交流を目的としており、現地の子どもたちが楽しそうに活動に取り組みの様子が見られました。本講義では、授業実践等の他に、現地の博物館、文化遺産の見学も行われました。特にスミソニアン博物館群では、日本にはない規模の博物館をいくつも見学し、貴重な展示品を多く見ることができました。



担当
松浦 武人 先生
木下 博義 先生
中島 敦夫 先生

授業紹介



海外教育実地研究

執筆 沖坂 柚香 (教育実践開発コース1年生)

海外教育実地研究とは、夏休みの期間を利用して約1週間、海外へ渡航し、現地の教育関係機関の見学や、小・中学校における授業実践を行う科目です。今年度は院生4名、修了院生1名の計5名が参加することとなりました。5月から8月まで授業実践の準備や指導案の検討等を事前研修で行い、9月にアメリカでの実地研究が行われました。

世界に向かう力を培う 国語科授業の構想と実践

羽島 彩加 (教育実践開発コース2年)

予測不可能な今日の世界に適応するには、バランスのとれた認知的スキルと社会情動的スキルが必要だと言われています。私は、こうしたスキルが「世界に向かう力」につながると考え、小学校国語科を通して培うための研究を進めています。

1年目の研究では、説明的文章を読み、探究的な学びを展開しながら学習者に研究をさせることが、学習者に学びのサイクルを生み出すことが分かりました。2年目の研究においては、伝記を読んで人の考え方や生き方について考えを交流させたり、「ヒロシマを生きる人」について聞いたことをもとに口承し、人の生き方に迫らせたりすることが、学習者自身の考え方を深めることが分かりました。

これらの研究から、学習者に「世界に向かう力」を育成するには、学習者自身が自分の方法で課題を探究し、自らの学びを実感することが大切だということが分かりました。今後も「世界に向かう力」の育成について研究を進めたいと考えています。



▲アメリカ在住の美甘章子先生とオンラインでインタビューをする様子

私の研究



院生の研究内容をご紹介します！

児童の「動きの知識」から学習内容を構成する 体育科授業の研究

田中 佑明 (教育実践開発コース2年)

近年、運動をすることが嫌いという児童が増えています。運動の嫌いな児童のほとんどは体育の授業で自分の動きの質が向上していることを実感できないと言われており、体育授業で運動技能の向上を図ることが必要です。また、運動が苦手になる理由の一つに間違った知識を児童が持っていると言われていました。そこで、運動技能向上のために児童が持っている「どうすればうまくできるかについての知識」が関わっており、それらのことを教師が理解した上で、運動をする上で必要な知識を児童が構成できるような授業づくりが重要であると考えています。

私は、小学校体育科において、児童が持っている既知知識を取り出し、それに基づいた授業構成を試みる授業づくりについて研究を進めてきました。昨年度のアクションリサーチでは、小学校高学年に行かせていただき、マット運動の側転について授業を構成しました。知識に関して授業前後で、教師の意図を踏まえた記述が増加したことや、正しい側転のやり方を伝えたことで、側転の基本の形を意識して取り組む児童が増加し、そういった内容の記述も見られました。その一方で、半数の児童は自由記述で内感的な記述が少なかったという課題が見られました。

そこで、今年度のアクションリサーチでは児童の日常生活や普段の遊びなどから経験的に身につけているであろう「遠くにボールを投げる」という基礎的運動能力に着目し、児童の知識と技能の変容を分析し、取り上げた手立てが有効だったか検討していきたいと思ひます。

ご指導いただいている先生方の教育・研究

学生と関わることで、 自分自身も学ばせてもらっている。

学校マネジメントコース

藤川 照彦 先生

ふじかわ てるひこ

大学院人間社会科学部 准教授
専門分野：学級経営論



藤川先生は、実務経験38年という豊富な経験を活かし、トライアングル体制の実務科教員として実践的な目線から指導や助言を行っていらっしゃいます。

教職大学院にいられて半年が過ぎ、教職大学院について聞いてみたところ、「院生はとても真面目で、夢や目標に向かって努力している姿が印象的。先生方も院生のために授業や取組を一生懸命行う。この様子は実際の現場と一緒にあると感じ、とても刺激を受けながらも新鮮な気持ちで半年間を過ごした。学生と関わることで、自分自身も学ばせてもらっている。」とおっしゃいました。豊富な経験や知識をお持ちである藤川先生でも、常に学ぶ意欲が高いことや、「学ばせてもらっている」の言葉からわかるように、リスペクトをお持ちであり、教師としてだけでなく、人生の先輩として偉大さを感じました。

「教師は他の仕事にはない魅力があり、子どもの将来に影響を与える存在であるとともに、教師も子どもたちから影響を受ける。」「クラスは家族」という、先生が現場におられた時に意識していたことを伺って、子どもと教師はただ教える関係ではなく、お互いから学び合う関係であることを改めて感じました。



▲広島愛に溢れる温かい雰囲気の研究室です

執筆

新野 悠太

(教育実践開発コース2年)

坪井 美咲

(教育実践開発コース1年)

理詰めで行動しても教室は動かない

教育実践開発コース

松本 仁志 先生

まつもと ひとし

大学院人間社会科学部 教授
専門分野：国語教育・文字教育・書写教育



松本先生は現在、文字教育のカリキュラム開発をされており、学びの場における書くことの意義や文字の果たす役割を追究されています。書くことは単なるスキル、伝達手段の一つに過ぎないと思われがちです。しかし、先生は書くことは表現であり、自己投影の面もあると考えられています。そのため、書くことの楽しさや素晴らしさを多くの人に伝えたいという思いから、メディア出演などの活動も積極的に行われています。

インタビューの中で松本先生は、バランスをとることの重要性について強調されていました。「4回の実地研究だけで理論は完成しない。それでも、教職大学院の掲げる理論と実践の往還を体感してほしい。理詰めで行動しても教室は動かない。」先生自身、大学教員になられる以前、千葉県と広島県で6年間学校教員として働かれていました。その6年間が実践的な感覚を掴むうえでとても役に立ったそうです。私はどうすれば自分の想定通りに授業が進むのかと理論ばかりに捉われがちだったので、実践経験の豊富な現職院生との交流や実地研究を通して自分を俯瞰して捉え、実践的な感覚を養っていきたくと思いました。



◀漢字の書き順について、「チコちゃん」にも出演!

執筆

竹久 慧

(教育実践開発コース1年)

加藤 滉教

(教育実践開発コース2年)

リスペクトからのスタート

教育実践開発コース

伊藤 優 先生

いとう ゆう

大学院人間社会科学部 准教授
専門分野：家庭教育学と保育学



伊藤優先生は家庭教育と保育学を専門とし、主に家庭科における幼児とのふれあい体験、幼児期・児童期の食育について研究をされています。元々、高校家庭科教師を志されていた伊藤先生は、教育実習で出会ったある先生のふれあい体験の実践に感銘を受け、幼児教育に興味を持たれたことがきっかけで研究の道へ進まれました。

教育現場や保育現場で教育・保育を担われておられる先生方へのリスペクトから先生方が持つ暗黙知を解明したい思いで研究に取り組みられています。伊藤先生は、ご自身の経験から「研究を進める中で壁に当たらない人はいない。壁に当たって、そこを乗り越えるから、他の人たちと違ったオリジナリティが生まれ、よりよい研究ができる」とおっしゃっていました。また、教職大学院生に向けて、教職大学院の特徴を活かし、他の専門の人との意見交流を通して良いところは学びつつ、自分の軸を持って研究を進めることの大切さについてメッセージをいただきました。

インタビューの中で、周りの方々へ敬意を持ちつつ、交流をしっかりと行うことの大切さを学びました。いつどこで自分の転機となるような出会いがあるかわからない中で、常に会う方々へのリスペクトを忘れずに交流することで、自分で素敵な出会いは作れるのかもかもしれないと感じることができました。教職大学院の方々ははじめとして、アクションリサーチやこれからの教職人生で出会う方々へ積極的に交流を行い多くのことを学んでいきたいと思ひます。



▲学生が作成した乳幼児用のおもちゃです

執筆

沖坂 柚香

(教育実践開発コース1年)

小佐古 澤

(教育実践開発コース2年)

編集後記 / 第8号

広島大学教職大学院ニュースレター第8号をご覧ください。ありがとうございます。今回の号では、教職大学院で前期に行われた行事を中心に取り上げました。教職大学院では校種や教科だけでなく、海外の教育についても触れることができます。この院での学びを今後の教員生活に活かしていきたいと感じました。

担当 / 田中 佑明

(教育実践開発コース2年)